

句
遊

第
八
集

平成十九年三月

序に代えて

佐藤 政夫

「俳句は作って遊ぶもの」と本会を「句遊会」と名付けた創会時の会員の気持ちそのままが現在にも引き継がれ、早十七年が経過しようとしています。

二年おきに発行してきました「句遊」も第八集がここに発行できますことを会員の皆様と共に慶びたいと思います。

本会は月に一度の句会があります。あらかじめ決められた兼題と当季雑詠を併せて、各自が三句づつ投句してお互いに選句と講評を行っています。

遊び心の旺盛な会員がほとんどで楽しい作品が多く、句会は和やかな雰囲気の中で行われています。

本会に入会して三年余の歳月が経ちますが、作って遊ぶ俳句と句会の楽しさに魅せられています。

掲載句一つ一つには、日頃平易に流れてゆく時間の中で、俳句という遊び心で時を止め、そのとき

の情景や感動が描かれているものと思います。

句集を開くことによって、自作句のそれぞれが楽しい思い出として蘇るとともに、句集は、句会での楽しいひと時の思い出の記録でもあります。

読者の皆様には、本句集をご覧いただいで、俳句で遊ぶ楽しさを感じていただければ幸いです。

監査懇話会の会員会友の方々には俳句で共に遊ぶ仲間として、句会に遊びに来ていただけたらと思います。

(付 記)

平成十七年、十八年度句遊会の活動状況

月例句会：平成十九年三月が第二〇四回

写友会、画友会との合同展　：平成十七年九月

同　　平成十八年十一月

吟行句会：平成十七年 四月　清澄庭園

平成十七年 十月　伊豆高原一泊

平成十八年 四月　上野動物園

平成十八年十一月　亀戸天神

目次

| | | | | | | | | | | | |
|------|------|------|------|-----|------|-------|------|------|------------|------|------|
| 三病息災 | 醉芙蓉 | 言靈 | 初詣 | 猫 | 和顔愛語 | 寒雀 | 少子化 | 春の雪 | 家族のことなど(二) | 夏帽子 | 菊の国 |
| 六川里風 | 向井眉山 | 宮川至剛 | 宮川弘道 | 三宅申 | 林泰亀 | 生江沢広雄 | 中路素童 | 清家静楓 | 眞田宗興 | 佐藤政百 | 石野喜峰 |
| …… | …… | …… | …… | …… | …… | …… | …… | …… | …… | …… | …… |
| 二八 | 二六 | 二四 | 二二 | 二〇 | 一八 | 一六 | 一四 | 一二 | 一〇 | 八 | 六 |

作

品

五

菊の国

六

石野喜峰

能笛の響き凜々なる余寒

灯台の明かり棚引く夕霞

花嫁の車と出会ふ若葉道

水彩の濃いも淡いも新樹かな

おてんばも腕白坊主も昼寝どき

岩清水山の靈気を咽喉に受く

サイパンの崖に慰靈碑夏の蝶

風紋を描く砂丘や夏落暉

少年兵今や翁びたる晩夏

新涼や五風十雨の空の下

秋晴に影の深さよ逆さ富士

親王の誕生祝ふ菊の国

踊り子の通れる道や蜜柑生る

退院の街は明るき小春かな

小春日や亀は好みの石に乗り

いかにして老いを隠さん冬帽子

傘寿まで持つかな五年日記買ひ

湯豆腐やともに白髪の二人酒

夏 帽 子

八

佐藤政百

関八州芽吹き
の雨にけぶりをり

安房丘陵九十九里
へと夕霞

童顔が花中にありて
同窓会

トンネルを出でて
越後の新樹光

懐かしき海の響きや
夏来る

滝しぶき白い世界に
誘ひ込む

念仏の鉦たたく音
枇杷うるる

遠つ世のくらしは
如何大賀蓮

微笑みの裏に何かサングラス

遠方に人の輪妻の夏帽子

岩に浸む水黒々と秋涼し

朝顔や妻の笑顔に見送られ

象潟や隆起の小島稲穂波

小春日や垣根越しなる長話

潮の香をそのまま啜る生牡蠣かな

寒月や黒い巨船に黒い海

馬立ちて野に嘶きの冴え返る

ことなきの日記の日々や年の夜

家族のことなど(二)

眞田宗興

春浅し畠中に墓ぼつとりと

鉄棒にぶら下りてや辛夷咲く

自画自賛なくば生きれぬやせ蛙

この上水たどれば母の薔薇の家

夏雲や千古の森を孫と行く

疲れると初めて母いふ蟬時雨

物忘れ競ふ夫婦よ耐へよ夏

残り夏やはり茶漬に香の物

生きて死ぬ宇宙の端こに秋が来る

この一步命なりけり母の秋

ひぐらしに診療科目増えにけり

秋雀そろひて逃げるは遊びかや

繋がれて犬見上げをり赤とんぼ

都庁ビルの下から出たり秋の月

冬地下道たった一人が歩きをり

佛さま冬のお日さまごちそうさま

初雪や昭和が恋しくなりにけり

除夜の鐘日進月歩は孫ばかり

春の雪

一一一

清家静楓

初詣午前零時の大太鼓

春の雪地に着くまでの命かな

春浅しいつか壊れる忍ぶ恋

霞消え母船離れる舂かな

誰よりも先に早起き柿若葉

小夜嵐山ごと揺れる新樹かな

遠雷に片付け急ぐ農作業

寝足りても老いの日課の午睡かな

向日葵や支への丈の足らざりき

廃屋のままに朝顔今年また

運動会歓声つなぐリレー走

海と空青一体の伊豆の秋

秋晴れや草津湯畑白けむり

半時のまどろみ解けぬ小春かな

懸崖の長きしだれや菊美人

寒椿寡黙の武士の香りあり

少しづつ餅ふくらみておかめ顔

女房の指図のままに年の暮れ

少 子 化

一四

中 路 素 童

溢れ出づ神水受けて初詣

行く人の声に春来る日本橋

武蔵野の昔に返る夕霞

春愁や分別顔のゴリラ居て

恋猫を追ひし女の残り艶

蔵を継ぐ女系一族柿若葉

天神の撫で牛光り梅は実に

酒蔵を守りて涼し京ことば

枇杷熟れて銚子電鉄岬行き

開け放つ高床神殿涼新た

マネキンの水着恋しき熟女かな

鬼灯を吹きし舞妓のおちよぼ口

秋うらら少子化何処に動物園

越の風穂波の果てに日本海

立読みし古本神田の小春かな

朱の鳥居天神の空冬に入る

雪の精炎を秘めし久女の忌

丹の廊に裸電球除夜詣

寒

雀

生江沢広雄

葉を残す白磁の皿の桜餅

花筏二つに割りし河馬の顔

花疲れ丹頂鶴の羽づくろひ

開発に男滝女滝の水も涸れ

青豊座蒲団腹に昼寝かな

夕映えの羅漢の顔や竹落葉

ビーチバレー端切れの水着躍動す

緑雨降る黒部の川のエメラルド

千枚田月煌煌の星祭

こほろぎや旅寝の闇の濃かりけり

颱風や相輪曲がる龍口寺

秋の涛俎岩をすりへらし

秋涼し海の家なき広さかな

菊の香や老いの手すりの太鼓橋

すすき原色なき風の吹き渡り

日だまりに動かず一羽寒雀

ふつつつと味噌香りけり牡蠣の鍋

ふつくらと夢ふくらみし蒲団かな

和顔愛語

一八

林 泰 亀

花柳の鼓旋の舞や春の雪

春浅し棟おうちに染まる明けの富士

春浅し心字の池の泥うごく

春うらら鳩に餌やる靴磨き

大船に和顔わげん愛語の花匂ふ

ケニアにはなき花吹雪獅子眠る

OB球はるか新樹の森越えて

風若葉鞆の光る一年生

白神の木洩れ日浴びて滝奔る

鬼平も好みし店やどぜう鍋

銀座にも彩あでやかに夏の蝶

道祖神守りゐるやに黒揚羽

七夕やまなこきらきら園児たち

吊橋の眼下の淵に龍潜む

シーソーに母とふたり子秋日和

丑三つや恋唄を聴く蒲団なか

雪吊りの縄あたらしき心字池

想ひ出に賀状抄まず夜は更けぬ

猫

三宅 申

白梅や凜冽の氣にうるみ初む

料理屋の屋根まっしぐら恋の猫

黒猫ののそと去りけり木の芽道

草餅や大川を越す寺の鏡

春灯長き廊下の外湯かな

三社祭三回出会ふ神輿かな

父の忌やうから弾みて鮎すすむ

ながながと猫と昼寝の座敷かな

書を読みてひと日もの憂き大暑かな

秋涼し俄に到る雨の音

朝顔や母への憶ひちらと過ぐ

鬼灯市ことさらに実の大きかり

忽ちに閉ざせる霧の碓氷かな

秋深し行交ふ人の佳人なる

小猫またぐ小春のCの無音かな

地に伏さむばかりの重み竹の雪

焼芋や猫ちよこなんと膝にあり

金閣寺苔を辿りて寒椿

初詣

宮川弘道

玉砂利を踏む音途切れぬ初詣

観音像拝みてをれば初日の出

春浅し鑿跡著き観世音

写経する窓の明るき春の雪

水の面に影をおとせる滝さくら

紫陽花や地藏ぼろりと雨しづく

少女らは派手な水着で日に焼けり

台風一過朝から見ゆる筑波山

七夕の人出見下ろす今朝の秋

秋祭の雑踏を行く車椅子

筑波嶺の綾線著き良夜かな

百年の生家の花に秋の蝶

いわし雲永平寺より碧眼児

平泉兵のごと稲架の立ち

五十鈴川鯉のはねをり紅葉晴

那智滝を斜に過ぎり银杏散る

紅葉散る遷宮近き伊勢の宮

那智滝の小雨にけふる冬黄葉

言 靈

宮 川 至 剛

大旦那形見の紬纏ひけり

獅子頭抱きて茶髪の若衆かな

落葉松の芽吹かんとして幹匂ふ

山頭火読む枕辺や猫の恋

海翔けて月夜を翔けて初燕

新茶くむ白磁の底の色あらた

碓氷ゆく鉄路すたれし谷若葉

酒古りし青梅琥珀の色添へぬ

走り梅雨千曲の水の翳動く

南禅寺大門のぼる蟻の道

秋涼し朝の月の透きとほる

白木槿天蓋として野の祠

曼珠沙華熊野御幸の道寂びて

山柿を嚙る疎開の味嚙る

潮の香をこぼし殻牡蠣届きけり

言霊の階わたる冬の月

葉籠りの紅かそけしや寒椿

年の夜や那智大滝に灯を奉ず

醉芙蓉

向井眉山

玉砂利の凜と響きて初詣

あどけなき少女の瞳春浅し

潮風や明石海峡春霞

草餅や奥深き店根津谷中

余生なほときめきの日々新樹光

あへしらふ色即是空蟻歩む

休日のランチはパスタ夏に入る

稲妻や五百羅漢の笑い顔

信号を待つ間の一句酔芙蓉

沸き上がり崩れて湧きて泉かな

子等の声路地に溢れて星祭

ほつほつと昏れて浅草鬼灯市

人の世は照る日曇る日夏の蝶

寂寞の鹿島の杜や秋気澄む

波の上に佐渡を浮かべて小春かな

母と子の笑顔と笑顔菊日和

年の瀬や風に乗り来し流し歌

潮の香のふと香り来し酔牡蛎かな

俳句を始めてやっと五年になりました。まだ語呂あわせ、
字並べ、に過ぎぬと自覚しております。変わらぬご愛顧
とご叱正をお願いいたします。

三 病 息 災

六 川 里 風

何はとも三病息災去年今年

雪のまだまぶしき越の春浅し

草餅の大きを母に供へけり

春昼や夢喰ふ猓も夢見をり

のどけしや象のまつ毛の長きこと

梢より風の湧きたつ新樹かな

白日にうぶ毛の光り枇杷熟るる

掬ふ手のしづくに濁る泉かな

太く書き三病息災星まつり

夾竹桃引揚げて早や六十年

稲架襖出入り楽しむ雀どち

山の湯や焼松茸を存分に

白菊の白をまぶしむ術後の眼

松島湾波に相倚る牡蠣筏

秋晴れの浅間は煙吐きつづけ

久々に畳替せし匂ひかな

佗助の小ぶりの花の二つ三つ

煩惱をこそぎ落とせよ除夜の鐘

あとがき

『句遊』第八集をお届けします。

本集への出品は十二名で、前集より四名の減となりました。途中で三宅申さんが退会されましたが、編集委員の方で作品を選び載せておきました。

吟行句会は平成十七年、十八年にそれぞれ二回行い、内一回は一泊吟行でしたが、今後もできるだけ増やそうと思っております。また、講師として平成十七年には元会員の吉村正氏（昨年逝去）十八年には同じく元会員の長谷川草洲氏を招いて講評、添削していただきました。

編集に当り、出品は従来同様、自選十八句とし、前書き、ルビは原則として付けぬこととしております。なお、今集から、出品の後の余白を使い、自由に短文を書いていただくこととしました。

次集第九集は平成二十一年を予定しております。会員の皆様の一層のご協力をお願いすると共にご健吟をお祈りします。

平成十九年三月

編集委員

石野 喜次
佐藤 政夫
中路 良昭
生江沢広雄

（中路 良昭記）